

実践女子大学空間デザイン研究室 2018 年度卒業論文

■階段を通して見る世界

日野市は台地と川が交錯する地形で、その高低差に多くの階段が存在する。そんな日野市の階段を対象として、その視覚的・物理的・心理的体験によって得られる階段の魅力を探ろうと試みた。調査は、日野市内の階段 130 ケ所を実際に巡り、階段の実態を客観的・主観的に記録した。

数多くの階段を巡って考察を繰り返すことで、どの階段にも何らかの「物語」を創り出し、人をその「物語」の世界に誘う役割がある、いわば「世界を体験させる装置」としての意味を見出すことができた。その役割は、大きく次の 3 種に分類された。

- (1) 階段の上の世界と下の世界をつなぐ
- (2) 既存の世界に新しい視点を提供する
- (3) 周囲から自立した世界を創り出す

(3) については、「物理的な構成要素によって作り出される世界」「構成要素をきっかけに想起され広がる世界」「仮想の私が主人公として振る舞う世界」というバリエーションを見出すことができた。

階段の中には、その形状やアプローチによって、これら(1)～(3)が複合され、より複雑な魅力を見せるものがある。また、階段に他者が存在した場合、他者の生活世界に思いを馳せるとともに、他者が体験しているだろう階段の世界を追体験したり、他者も同時に私の世界を追体験しているだろうことを認識するといった、複雑で多様な関係が生じ、階段の体験に豊かな魅力が付加される。

■実践女子大生の暮らしから見る日野

日野市は、これといった特徴が見出しにくく、大学に日々通う学生も日野に強い印象を残さないと言う。実際に市内に在住する学生は、日常どのように地域を使いこなし、地域に価値を見出しているのか、その実態に迫る。44 名の実践女子大学生を対象とし、市内で「よく訪れる場所」、そこでのエピソード、通る道などを尋ねた。

個々の生活パターンは、必要最低限の関わりしかしない学生、かなり広範囲を使いこなす学生、地元に行きつけの店をいくつももつ学生など、多様であった。

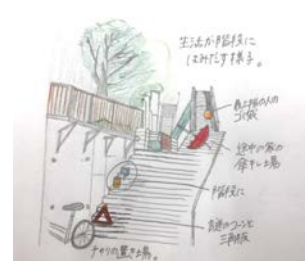
抽出された場所は合計 158 カ所 (14 カ所/人)。飲食店、スーパー・コンビニなど、生活に必需の場所が多く挙げられた。これらの場所は、駅前の店舗が集中する地域以外でも、市内全域にわたり分布していた。

「好きな場所」として多く挙げられたのは、高台・階段・坂道から見下ろす街の景色、緑や水のある街並みなど、高低差と水路や緑の豊富な日野市ならではの景観にまつわるものが多い。飲食店の主人や地域の子供など、地元の人と関わりをもてる場所も挙げられた。

「交流のある場所」をみると、学生が地域の中でさまざまな形で地元の人と関わっていることが分かる。よく訪れる店の店員との関わりが多いが、顔見知り、挨拶程度のものから、人生相談のレベルまで多様である。大家さん、行きつけの店、大学での地域活動などを通して、地元の人と知り合いが増えるきっかけがあることも分かった。



(図 1-1) 日野市の階段



(図 1-2) 調査スケッチ



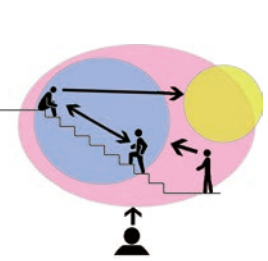
(図 1-3) 新しい視点



(図 1-4) 仮想の自分が動き出す



(図 1-5、6) 他者がいることで体験が多層化・複雑化する



(図 2-1) 事例 21
自転車で広範囲に移動
様々な場所に顔見知り



(図 2-2) 好きな場所
39 カ所のコメント



(図 2-3) 交流のある場所
40 カ所のコメント

■ユーカリが丘の魅力と課題に関する研究

千葉県佐倉市ユーカリが丘は、1970年代から開発が続くニュータウンである。「山万株式会社」が宅地開発、住宅供給、交通システム、維持管理等を一手に行っており、開発当初から毎年200戸に限定して分譲を行っている。4地区の居住者にアンケート調査を行い、ユーカリが丘の魅力と課題を明らかにする。

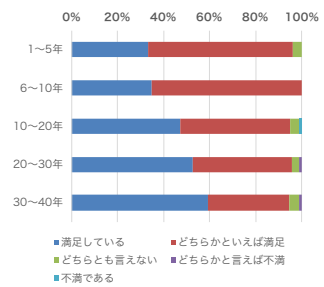
全体に地域に対する満足度は極めて高く、住み続けの意向も総じて高い。居住地域によって、入居時期や周辺の整備状況が異なるため、居住者意識には多少の差がみられる。居住歴の長い人ほど、地域活動へ積極的に参加し、住み続けの意向も高い。山万の提供するサービスを受けているかどうかは、満足度などへ大きな影響は与えていない。

自由記述のコメントを見ると、全体に山万の取り組みに対しては評価が高いが、山万と居住者との目線のギャップ、一社独占であることのリスクなども寄せられた。初期の居住者に比べ、環境が充実しているはずの最近の居住者のほうが、街の環境や利便性に対する不満や要望が多い。高齢化の一方で若い世代の入居も多く、人口構成バランスを評価するコメントは多いが、入居時期による居住者の街に対する考え方や取り組み方に差があることも言及されている。

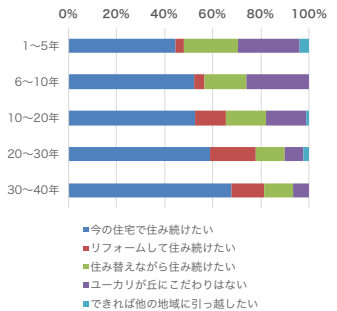
初期からの居住者は、積極的に地域活動にも参加し、事業者と一緒にまちづくりに関わってきた意識が高い。しかし新たな居住者は、最初から評価の高い街に入居し、充実したサービスを前提とする受け身の意識が強まっている可能性がある。少しずつ顕在化する居住者間、あるいは居住者と事業者との間の意識のギャップが、街の課題と考えられる。



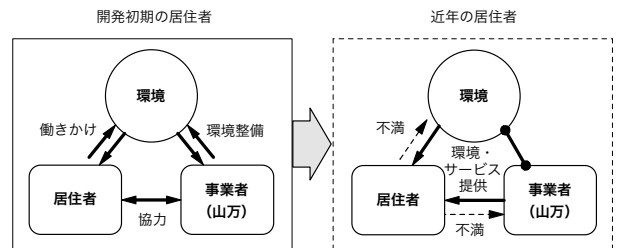
(図 3-1) ユーカリが丘



(図 3-2) 居住年 × 満足度



(図 3-3) 居住年 × 住み続け意向



(図 3-4) 環境を巡る居住者と事業者との関係の変化

■柿の実幼稚園～屋外空間の魅力

川崎市にある私立「柿の実幼稚園」は、10000㎡の広大な敷地をもつ園児数約1000人の大規模な幼稚園である。園舎は敷地に分散して建てられ、敷地内には、芝の園庭、池、裏山、畑など多様な外部空間があり、既成の遊具だけでなく、敷地の状況を活かした多様な園長手作り遊具が配されている。こうした充実した屋外空間を活用した保育の実態を捉えるとともに、子供に与える影響を考察する。

大きく、園庭芝生部分、園庭遊具部分、職員室周り、裏山に分けて観察を行った。芝生部分では主にクラス単位やクラスの枠を超えてグループでの遊びが多く、オープンな空間で先生を囲むようなコミュニケーションが見られた。遊具部分では、基本的な遊び方以外に、遊具の特性を活かして新しい遊びが開発されていた。2~3人で一緒に遊びながら、あるいは他の目から隠れた場所での関わりが見られた。職員室周りでは、とくに遊具はないが、配置されているベンチや池のデッキ、樹木などを使って、それを話題にしつつ、自分の居場所を発見するような遊び方が見られた。畑もある裏山は、自然との触れ合いがメインとなる。樹木を遊具とみなしたり、果物をとったりすることが、家に帰ってからもコミュニケーションのきっかけとなる。

園内に多様な空間・場所が設けられ、さまざまな空間を使い分けることで、園児には多様な体験と関わりがもたらされている。多彩な年間プログラムと空間の豊かさは、園児に豊かな体験をさせたいという園長の想いが反映されている。



(図 4-1) 柿の実幼稚園

(表 4-1) 各空間ごとにみる遊びとコミュニケーション

| 園庭・芝生部分 | 園庭・遊具部分 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 広い芝生 グループでの基本的な外遊び グループでの交流・先生中心の集まり・いろんな子供が自由に開く 身体づくり・社会的ルール 包括的な場・関わりが広がる | <ul style="list-style-type: none"> 多様な遊具 既成の遊び方・遊具の特性を活かした遊び 秘密話・遊びの延長の交流・自分たちだけの場所を見つける 個別の身体性・様々な工夫 獲得的な場・選択的な関わり |
| 職員室周り | 裏山 |
| <ul style="list-style-type: none"> 池、デッキ、時計塔(遊具なし) 作られた環境に遊びを見つける 環境が話題となるコミュニケーション 環境の探索・遊びへの変換 発見的な場・一人/少人数 | <ul style="list-style-type: none"> 自然(森、畑、樹木) 見る、触れる・収穫する・味わう・四季を感じる 自然の中で発見したものが話題となる・家に持ち帰っても話題が広がる 自然を学ぶ・発見・感動 自然との対話・自然を介した場 |